

1. 概要

山口学芸大学で実施する、数理・データサイエンス・AI 教育プログラム「データ科学と社会」を持続的に発展させるべく、自己点検・評価を行い、改善につなげる。

2. 自己点検・評価

(1) 学内からの視点

自己点検・評価の視点	点検結果	自己評価	評価結果の根拠・理由	改善計画	点検・評価項目に係る根拠資料・データ
① プログラムの履修・修得状況	<ul style="list-style-type: none"> 令和7年度の本教育プログラムには、入学定員70名のうち11名(昨年度39名)が履修しており、履修率は16%(昨年度56%)であった。 教育プログラムの修了者は11名(昨年度38名)であり、履修者11名が全員修了した。 	△	<ul style="list-style-type: none"> プログラムを開始して2年目のため、収容定員に対する履修率が低い。令和8年度入学生から全学卒業必修科目としていることから、履修率は100%になる予定である。 このプログラムの修了者の割合は高い水準であり、良好な結果が得られている。 	<ul style="list-style-type: none"> 令和8年度入学生から全学卒業必修科目としており、履修者数、履修率については学年進行で全学生・100%となる計画である。 今後、1学年70名が受講する上で適切な学修環境となるようクラス分割により構築する予定である。 	<ul style="list-style-type: none"> 第1回委員会資料(令和8年2月26日開催) 単位取得率【令和7年度前期】
② 学修成果	<ul style="list-style-type: none"> 教育プログラムを構成する「データ科学と社会Ⅰ」及び「データ科学と社会Ⅱ」の成績評価について、「B(望ましい基準に達している)」以上の評価を取得した者は、どちらも100%(昨年度95%)であった。 教育プログラムを構成する当該授業科目の授業アンケートについて、「シラバスに記載された講義の到達目標を達成したと思いますか?」という質問に対し、「そう思う」「ややそう思う」と回答した学生の割合は、「データ科学と社会Ⅰ」が91%(昨年度84%)、「データ科学と社会Ⅱ」が91%(昨年度80%)であった。 	◎	<ul style="list-style-type: none"> 本学では、当該授業科目の到達目標について、望ましい基準まで到達していることを確認する指標として、成績分布を利用して、「B(望ましい基準に達している)」以上の評価取得者が50%以上を基準としている。教育プログラムを構成する「データ科学と社会Ⅰ」、「データ科学と社会Ⅱ」とともに100%(昨年度95%)と基準を満たしており、良好な結果が得られている。 教育プログラムを構成する「データ科学と社会Ⅰ」及び「データ科学と社会Ⅱ」の授業アンケートからも、学生は到達目標を一定以上満たし、学修成果を実感していることを確認できる。 		<ul style="list-style-type: none"> 第1回委員会資料(令和8年2月26日開催) 成績分布【令和7年度前期】 授業アンケート【令和7年度前期】

<p>③ 学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度</p>	<ul style="list-style-type: none"> 教育プログラムを構成する当該授業科目の授業アンケートについて、「この授業の内容を理解できましたか？」という質問に対し、「そう思う」「ややそう思う」と回答した学生の割合は、「データ科学と社会Ⅰ」が100%（昨年度82%）、「データ科学と社会Ⅱ」が91%（昨年度86%）であった。 	<p>◎</p>	<ul style="list-style-type: none"> 教育プログラムを構成する「データ科学と社会Ⅰ」及び「データ科学と社会Ⅱ」の授業アンケートから、当該科目の理解度について、学生は一定以上達成できていることが確認できる。 		<ul style="list-style-type: none"> 第1回委員会資料（令和8年2月26日開催）授業アンケート【令和7年度前期】
<p>④ 学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度</p>	<ul style="list-style-type: none"> 教育プログラムを構成する当該授業科目の授業アンケートについて、「この授業について満足しましたか？」という質問に対し、「そう思う」「ややそう思う」と回答した学生の割合は、「データ科学と社会Ⅰ」が100%（昨年度92%）、「データ科学と社会Ⅱ」が91%（昨年度86%）であった。 	<p>◎</p>	<ul style="list-style-type: none"> 教育プログラムを構成する「データ科学と社会Ⅰ」及び「データ科学と社会Ⅱ」の授業アンケートから、学生の高い満足度を得ていることが確認でき、今後、他の学生への推奨が十分に期待できる。 		<ul style="list-style-type: none"> 第1回委員会資料（令和8年2月26日開催）授業アンケート【令和7年度前期】
<p>⑤ 全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況</p>	<ul style="list-style-type: none"> 本学は、教育学部教育学科の1学部1学科で構成されている。 令和7年度の本教育プログラムには、入学定員70名のうち11名（昨年度39名）が履修しており、履修率は16%（昨年度56%）であった。 	<p>△</p>	<ul style="list-style-type: none"> プログラム開始2年目のため、収容定員に対しての履修率が低い、令和8年度入学生から全学卒業必修科目となるため、履修率は100%になる予定である。 	<ul style="list-style-type: none"> 令和8年度入学生から全学卒業必修科目となるため、履修者数、履修率については全学生・100%になる計画である。 今後、1学年70名が受講する上で適切な学修環境となるようクラス分割とSA配置により構築する予定である。 	<ul style="list-style-type: none"> 第1回委員会資料（令和8年2月26日開催）単位取得率【令和7年度前期】

◎ 課題を改善した、または、新たな取組みがあった、 ○ 特に問題はない、 △ 改善の必要な点があり、今後改善する、 × 改善の見通しが立たない

(2) 学外からの視点

自己点検・評価の視点	点検結果	評価結果	評価結果の根拠・理由	改善計画	点検・評価項目に係る根拠資料・データ
⑥ 教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	<ul style="list-style-type: none"> 本教育プログラムは、令和6年度入学生から開始したため、プログラム修了者はまだ卒業していない。卒業する令和10年度以降、卒業生アンケート、就職先アンケートによって把握する予定である。 				
⑦ 産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	<ul style="list-style-type: none"> 「大学リーグやまぐち（地域連携プラットフォーム）」が実施した、高等教育機関における今後の人材育成に関して調査した「山口県の産業界が求める人材像」（県内企業221社）アンケートでは、「円滑な人間関係や主体性」や「課題設定・解決能力」、「論理的思考力」に加え「社会人としての幅広い知識・教養及びデジタルの基礎知識を備えた人材」が挙げられている。 同プラットフォームが実施した山口県教育委員会へのヒアリング結果によれば、大学等が優先的に取り組んでほしい教育プログラムについて、「課題解決型の教育プログラム（PBL等）の充実」「IT・AIの基礎教育の推進」「文理の枠を超えた横断的な教育の充実」が挙げられている。 上記2項目（「山口県の産業界が求める人材像」「大学等が優先的に取り組んでほしい教育プログラム」）については現在も継続中である。 	○	<ul style="list-style-type: none"> 本教育プログラムの内容・手法等は、産業界からの視点を含めた内容になっており、産業界が求める人材養成に十分寄与するものと思料する。 「デジタルの基礎知識を備えた人材」については、「データ化学と社会Ⅱ」のシラバスの「データを守る上での留意事項」の項目によって達成している。 「IT・AIの基礎教育の推進」については、「データ化学と社会Ⅰ」のシラバスの「データ・AIの活用領域」の項目によって到達している。 		<ul style="list-style-type: none"> 第1回委員会資料（令和8年2月26日開催） 「山口県の産業界が求める人材像」（令和6年3月大学リーグやまぐち地域が求める人材育成ワーキンググループ） 山口県教育委員会へのヒアリング 「令和6年度第3回大学リーグやまぐち全体会議」（令和7年3月）

◎ 課題を改善した、または、新たな取組みがあった、 ○ 特に問題はない、 △ 改善の必要な点があり、今後改善する、 × 改善の見通しが立たない

(3) 不断の改善・進化に向けた取り組み

自己点検・評価の視点	点検結果	評価結果	評価結果の根拠・理由	改善計画	点検・評価項目に係る根拠資料・データ
<p>⑧ 数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること</p>	<ul style="list-style-type: none"> 教育プログラムを構成する「データ科学と社会Ⅰ」及び「データ科学と社会Ⅱ」の授業アンケートから、学生の興味・関心の高まりを確認することができた。 教育プログラムを構成する「データ科学と社会Ⅰ」及び「データ科学と社会Ⅱ」の講義内容から、妥当性を確認することができた。 	◎	<ul style="list-style-type: none"> 教育プログラムを構成する当該授業科目の授業アンケートについて、「この授業に対するあなたの興味・関心は高まりましたか？」という質問に対し、「そう思う」「ややそう思う」と回答した学生の割合は、「データ科学と社会Ⅰ」が100%（昨年度87%）、「データ科学と社会Ⅱ」が91%（昨年度83%）であった。 モデルカリキュラムリテラシーレベルの導入部分に準じた内容を展開し、時事問題や現在のトレンドなど社会の実例をもとにAI等がどのように活用されているかを中心に学生の好奇心を促す講義内容としている。また、データリテラシーに関する演習では、大学での学びの基盤となるICT技能の習得をはじめ産業界の事例としてインタビューや動画を見せたり、プログラミングに触れたりするなど、将来必要となる新しい知識を盛り込みながら、学生の理解を進めている。 		<ul style="list-style-type: none"> 第1回委員会資料（令和8年2月26日開催） 授業アンケート【令和7年度前期】 講義概要【令和7, 8年度】
<p>⑨ 内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること</p>	<ul style="list-style-type: none"> 教育プログラムを構成する「データ科学と社会Ⅰ」及び「データ科学と社会Ⅱ」の授業アンケートから、授業の準備や工夫より、分かりやすい授業になっていることが確認することができた。 	◎	<ul style="list-style-type: none"> 教育プログラムを構成する当該授業科目の授業アンケートについて、「この授業はわかりやすいように準備や工夫がされていたか？」という質問に対し、「そう思う」「ややそう思う」と回答した学生の割合は、「データ科学と社会Ⅰ」が100%（昨年度100%）、「データ科学と社会Ⅱ」が82%（昨年度83%）であった。 教科「情報」必修化により、中等教育段階での生徒の学びの構造や内容の前提が変わり、それに伴い授業内容を変更した。 		<ul style="list-style-type: none"> 第1回委員会資料（令和8年2月26日開催） 授業アンケート【令和7年度前期】

◎ 課題を改善した、または、新たな取り組みがあった、 ○ 特に問題はない、 △ 改善の必要な点があり、今後改善する、 × 改善の見通しが立たない